

書 評

『牧口常三郎全集』

第1巻～第10巻
1981年～1996年 第三文明社

坂 本 幹 雄

私は牧口研究の新参者である。第1巻の斎藤（1：605－606）¹の「校訂・脚注おぼえ書き」の「この根本史料を基礎ないし土台にして、将来における新視角＝新構想の牧口研究が築造され且つ天に聳ゆることを、衷心より願求してやまない」、「新来の牧口研究者がつぎつぎに現れてくることを、今は庶幾うのみである」等の一節は歓迎されているようで、うれしい。励まされる。

私は、「新視角＝新構想の牧口研究」かどうか、それほど自信はないが、一経済学徒として、主として次のようなテーマを考えている。

1. 『人生地理学』の経済思想
2. 牧口学習経済原理
3. 牧口価値論と経済学

これらのテーマは牧口研究の空白地帯ではないかと思う。これらを埋める作業に取りかかりたい。牧口の著作はかつて「経済学徒なのだからせめて価値論だけでも読んでおこう」と考えて『創価教育学体系』第2巻第3編の「価値論」を読んだだけだった。その後、いつの日か研究をと思い、左右田喜一郎の著作や牧口が利用した当時の経済学書などの古書を入手して少し準備はしていた。ようやく（経済学ではなく意味論の観点から少しであるが）「牧口価

1 『全集』本文からの引用は巻数と頁数を、牧口以外の引用は編集者・脚注・補注・巻数・頁数等と記す。引用の際、漢数字は算用数字に代えているものがある。

値論をめぐる」(坂本2016:254-257)を書いたことを契機に、あらためて牧口価値論と経済学の関係についていよいよ本格的に研究してみようと思立った。念のために他の主著だけでも読んでおこうとまず『人生地理学』を読んでみた。衝撃だった。経済学が満載である。そこで先に「『人生地理学』経済思想研究序説—牧口常三郎初期経済思想研究 1—」(坂本2019)を発表した次第である。『人生地理学』経済思想研究はまだ途中である。続編として「『人生地理学』の経済思想研究 2—牧口常三郎初期経済思想研究 2—」(未発表)もすでに完成している。その発表は年1回発行の同一誌で、1年後となるから、その間にと、念のために表題の『牧口常三郎全集』(以下『全集』と略記)を読んでみた。そうすると「学習経済」というテーマが浮上し、価値論に先立つ牧口の主張であるから、順序として先にまとめてみたくなった。以上により、牧口価値論と経済学のテーマまでなかなかたどり着けそうもないのが現状である。前置きが少々長くなった。本題に入ろう。牧口研究の新参者として(勢いそうならざるを得ないが)初心者目線で見ていきたい。したがって牧口研究の諸先輩方には何卒ご寛恕を乞う次第である。

*

まず「全10巻」のタイトル、刊行年、および頁数は以下の通りである。

- 第1巻 『人生地理学(上)』1983年、606頁
- 第2巻 『人生地理学(下)』1996年、551頁
- 第3巻 『教授の統合中心としての郷土科研究』1981年、348頁
- 第4巻 『地理教授の方法及内容の研究』1981年、409頁
- 第5巻 『創価教育学体系(上)』1982年、447頁
- 第6巻 『創価教育学体系(下)』1983年、532頁
- 第7巻 『初期教育学論集』1982年、467頁
- 第8巻 『創価教育法の科学的超宗教的実験証明 創価教育学体系概論 後期教育学論集Ⅰ』1984年、528頁
- 第9巻 『後期教育学論集Ⅱ』1988年、387頁
- 第10巻 『宗教論集・書簡集』1987年、446頁

「全10巻」となっているが、『全集』は未完である。「凡例」（第1巻～第7巻）によると「本全集は、牧口常三郎の全業績を、現段階までに蒐集可能となった資料にもとづき、能うかぎり原著・原論文のもととのすがたを復元するよう細心の配慮を注ぎながら、全10巻に収録した」となっている。第8巻の「凡例」では「全11巻」、第9巻と第10巻の「凡例」では「全12巻」となっている。第9巻の「凡例」によれば「第11巻には増補改訂版発行のさい大幅の修正の加えられた『人生地理学』の「第27章産業地論下」以下と、全面的な補訂の施された『教授の統合中心としての郷土科研究』全文とを、それぞれ別著作と見做して、これらを収める。別巻には、年譜・書誌・索引・参考資料その他を収める」となっている。最終配本は第2巻の1996年である。そこで第2巻の「凡例」を確認してみると「別巻には増補改訂版発行のさい大幅の修正の加えられた『人生地理学』の「第27章産業地論下」以下と第2巻に収録しきれなかった補注²とを収める」となっている。ちなみに第9巻の補注4（9：321－323）には「『郷土科研究』改訂増補版（本全集第11巻所収）」、補注5（9：323）には「本全集第11巻『郷土科研究』改訂増補版の序文」と「同書第30章「郷土教育」思想の史的考察及其と本書並に創価教育学との関係」の中からの引用がある。いずれにしても未完である。創価教育研究所の発見した新資料、その他の資料（「創価教育の源流」編纂委員会編2017：490-507）の収録を期待したい。

編集委員は、斎藤正二・佐藤秀夫・中川浩一・熊谷一乗・木俣力夫・末松義則・大村浩二の7氏、編集顧問に波多野完治・辻武寿の両氏。上記の編集委員以外に「凡例」によると「校訂・脚注・補注」の担当として、第7巻・第9巻に宮田幸一・麻生千明の両氏、第10巻に宮田幸一・尾熊治郎の両氏が記載されている。また第9巻の解題は宮田幸一氏が担当している。

2 補注は第19章「気候」第2節「気温と人生」の途中で終わっている。その続きが「補遺」として斎藤（2012,2013,2014,2015,2017,2019）に発表された。斎藤（2012,2013）第23章「社会」の部分、斎藤（2014,2015）第19章「気候」の部分、斎藤（2017,2019）第20章「植物」の部分。以下は未刊である。

なお『全集』の実現には、斎藤正二氏の蔵書が決定的な役割を果たしたらしい。第 1 巻から第 6 巻まで斎藤氏の蔵書を底本としている(斎藤 2010 : 682)。

*

研究者にとって、『全集』の最大の問題点は各版異同がない点である。各版異同があればいずれの版でもよいが、それがない以上は、最終版を底本としてほしかった。『人生地理学』はたぶん「訂正増補第 8 版」でよいだろう。第 2 巻の斎藤(547 - 548)「編纂・校訂・注釈おぼえ書き」に「別巻」に関する記述があり、「凡例」に予告があるが、要するに後回しにすべきではなかったと思う。『人生地理学』であれば上下巻であれ 3 巻であれ、連続にして参照できるようにしてほしかった。『教授の統合中心としての郷土科研究』も、底本はいずれの版にせよ、「改訂第 10 版」の内容を先に収録してほしかった。「凡例」は初版底本こそが大いなる成果と示唆しているが、研究者にとっては残念な結果となってしまった。結果的に先送りして未刊行なため、『全集』では最終版を参照できない。研究者は別途用意しなければならない。『人生地理学』研究でいえば牧口(1908)か牧口(1976)が必携である。いずれも誰もが簡単に入手できるというわけにはいかないだろう。

*

索引がない。別巻に予定されているが、各巻に付けるべきである。研究者にとって、この点に議論の余地はないだろう。

注記は「凡例」によると相応の基準を設定して脚注と補注とに分けているが、補注にした方がよいような長い脚注もあり、脚注でよいような短い補注もある。各巻の補注は、編集者の濃淡・温度差のようなものが感じられる。なお第 3 巻と第 4 巻は補注がない。

読者にとって、上記の点よりも、より大きな問題点は脚注方式である。脚注は 1 行 10 字(『人生地理学』は 3 欄のため 9 字)、活字も小さく、たいへん読みづらい。脚注が当該頁に収まらず、何頁も先にあり、たいへん参照しづらい。探すのに手間取る。まさに各版異同がない点に加えて、この点もまさ

に牧口学習経済原理に反する結果となっている。末尾一括注にすべきであった。2冊用意して読む場合にも圧倒的にその方が読みやすい。脚注ではコピーして参照することもできない。ほとんど全頁コピーしなければならない。末尾一括注であればそれはない。

牧口学習経済原理に反するのではないかと感じられる点はある。まず補注や解題における引用が、屋上屋を架している。少なくとも本文を補注や解題で大量に引用することはやめるべきである。頁数・行数に止めるべきである。『全集』の他巻の引用も大部のものが大量にあるが、特別な理由がないかぎり、やはり同様である。

さらに『全集』全体にわたって、貴重な資料が数多く収録されており、ありがたいのだが、「教育勅語」程度の引用（第10巻補注58（10：254））はともかく、「大日本帝国憲法」（第10巻補注59（10：254－255））や「治安維持法」（第10巻「資料」（10：442-446））等の収録は不要である。第○条第○項等で十分である。検索が容易な時代となってますますその感が深い。

その他、気になった細かな点を記す。編集が共同担当の場合、分担を明記すべきであった（後述の第10巻の問題の一因）。また第10巻の「解題・Ⅰ」と「解題・Ⅱ」は合わせて100頁以上もあるが無署名である。

補注や解題に引用されて、本文に収録されていないものがある。第9巻の補注79（9：158－159）に『新教』3月号と（か？）4月号が引用されている。さらに第10巻の補注15（10：81－82）の『牧口常三郎箴言集』からの引用、補注58の聖教新聞社編『牧口常三郎』の発言の引用がある。第10巻の「解題・Ⅰ」（10：362－363）の1942年11月の創価教育学会の第5回総会の引用、「解題・Ⅰ」（10：394）の大阪金太郎宛の手紙（1930年4月）の引用がある。これらがなぜ本文ではないのか理解に苦しむところである。ついでながら、対応する相手方の書簡は事情が許せば、補注か資料として収録してほしかったところである。

＊

『全集』の（少なくとも私にとって）最大の謎・衝撃は、いきなり第1巻の

冒頭にある。『人生地理学』の志賀重昂の「序」がない。「凡例」の示す「牧口常三郎の全業績」であるから除外したのだろうか。しかし「凡例」の編集方針にしたがって「能うかぎり原著・原論文のもともとのすがたを復元するよう細心の配慮を注ぎながら」「収録」したものである。志賀の「序」は原著の復元という形式の点からだけではなく、その内容の点からも『人生地理学』の背景理解にとって重要なものである。たとえば次の一節である。

「抑も此著、原稿二千ページにも上らんとす、唯だ出版の都合に依り今之れを其の半に縮めて公行す、……」(牧口1908: 2)

刊行された原稿は半分であることがわかる。当時も今も1000頁でも衝撃であるが、原稿がその2倍も存在していたとあって二重の衝撃である。

*

第3巻は「改訂第10版」で追加された章等の収録はないが、字句に関しては各版異同がある。また第3巻は「凡例」の編集方針と異なり本文＝原文を修正している。原文を修正してしまった個所(原文は脚注)(3: 134-5、152)と原文「ママ」の個所が混在して、読者に負荷をかける結果となっている。

*

第4巻の「解題」の中川(4: 403-405)は、「第8篇 外国地理の教授」における牧口の「帝国主義的言辞」を指摘して論争的な内容となっている。これに対して竹中(1986: 3: 227-233)、山口(2005)、山口(2009)等の反応がある。斎藤正二氏はどのように考えていただろうか、とふと思う。

*

第5巻の「学習の経済であると共に教授の経済である」(5: 26)に関して次のような脚注がある。

「経済学における経済は、財の生産、分配、消費に関する現象をさしているが、牧口は最小の労力で最大の利益あるいは効果をあげること、できるだけ無駄を省いて効率よく労力を使うこと、つまり効率性のよさ、利益率の高さ、という意味で使用している。学習上の労力、教授上の労力について無駄を最小限に少くし、教育の効率性、教育効果を最大限にあげるべき

ことを意味している。」（5：26－27）

最初に経済学の経済を指摘しつつ、牧口固有の経済の意味を説明している。しかしこれは経済原則の説明である。経済学に対する理解が一面的で狭く残念な記述である。これでは学習経済論というテーマもその研究の発展可能性も見えて来なくなってしまう。

第5巻の「編者あとがき」には次のような一節がある。

「その教育学の特異な広がり、波多野完治氏が指摘しておられるように『体系』を世界の教育学書にあまり例をみない“奇書”としているといつてよいであろう。／そういう特異な書物である……」（熊谷5：446）

当然、『創価教育学体系』を高く評価しているのだが、「奇書」はふつうあまりほめことばとしては用いられないだろう。「奇書」や「特異な書物」という点に、上から目線の教育学者たちの牧口に対する教育学史上における異端的位置づけが透けて見える・感じられる不快な一節である。古典は多様なものを含んでいるからこそまさに古典であるという側面がある。「編者あとがき」の論法で行けば、たとえばプラトンの『国家』もアダム・スミスの『国富論』もみな「奇書」になってしまう。『創価教育学体系』は「奇書」ではなく古典である。思い入れたっぷりに斎藤正二氏いわく。

「当時の東大教授・京大教授の教育学理論が、こんにち、全く再読に堪えないというのに、一方、わが牧口常三郎の『創価教育学体系』の真価がますます見直されているとは、人類の理性の歴史の究極的な曇りなき公平さを証して剩りないというべきである」（斎藤2010：2）。

このように評価したいものである。

＊

第10巻に収録された「獄中書簡」は、獄中から家族に対して生活指導・信心指導がなされている。牧口の生涯を見つめる者にとってまさに必読の箇所であると思う。

有名な最後の「獄中書簡」の問題に触れておきたい。その一部を引用する。

「カントノ哲学ヲ精読シテ居ル。百年前、及び其後ノ学者共ガ、望ンデ、

手ヲ着ケナイ「価値論」ヲ私が著ハシ、而カモ上ハ法華經ノ信仰ニ結ビツケ、
下、数千人ニ実証シタノヲ見テ、自分ナガラ驚イテ居ル。」(10 : 300 - 301)
これに対する補注 72 (無署名) (10 : 331) の中に「とりわけ「幸福」というこ
とに関しては、「幸福」を「自愛」と並べて述べるようなカントの幸福概念」と
いう一節がある。カント研究者ならずとも、これは暴論であると思うだろう。
カントの幸福論はこのような単純なものではない。はたして「最後の獄中書
簡—全集補注に対する修正案」と題する斎藤 (2010 : 669 - 674) からの手厳
しい批判を招いた (余計なお世話かもしれないが、少なくとも第 10 巻は編
集者同士で綿密な打ち合わせがなかったことがうかがわれる)。斎藤 (2010 :
673) によれば「補注執筆者が蔑視然たる語調で書いた」この「句節」は誤りで
ある。そう思う。なお斎藤 (2010 : 669) は「牧口が獄死直前まで「カント」ノ哲
学ヲ精読シテ居ル」厳然たる事実は、現代のわれわれとして、どのようにこ
れを解説＝了解するのが最良であるか」と問いかけているが、それに答えを
提示してはいない。おそらくその答えは、少なくとも補注 72 (10 : 331) のよ
うに簡潔にまとめられるようなものではないだろう。ちなみに私ならまず牧
口の「大善」とカントの「最高善」を比較してみたい。価値論・義務論・徳論・
人格論・幸福論・福祉論および宗教論等の観点から立体的・複合的・重層的
に考察してみたい。しかしお叱りを受けそうであるからやめておこう。経済
学徒の出る幕ではない。

*

以上に指摘してきたように、『全集』には編集上のさまざまな難点があるが、
ともかく記念すべき最新の『全集』である。最新とはいっても最終配本から
四半世紀が経ったが、ぜひ続巻 (別巻) が刊行され『全集』が完結されること
を期待したい。

<参考文献>

「創価教育の源流」編纂委員会編2017『評伝 牧口常三郎 創価教育の源流 第一部』第三文明社。

牧口常三郎1908『訂正増補人生地理学 全』文會堂書店、富山房（訂正増補第8版）。

牧口常三郎1976『人生地理学』復刻版、第三文明社（訂正増補第8版）。

斎藤正二2010『牧口常三郎の思想』第三文明社。

斎藤正二2012「『人生地理学』補注」補遺（第1回）』『創価教育』（5:209－243）所収。

斎藤正二2013「『人生地理学』補注」補遺（第2回）』『創価教育』（6:152－174）所収。

斎藤正二2014「『人生地理学』補注」補遺（第3回）』『創価教育』（7:87－127）所収。

斎藤正二2015「『人生地理学』補注」補遺（第4回）』『創価教育』（8:149－189）所収。

https://soka.repo.nii.ac.jp/>sokakyoiku0_8_13.pdf 2019年3月10日アクセス。

斎藤正二2017「『人生地理学』補注」補遺（第5回）』『創価教育』（10:85－115）所収。

https://soka.repo.nii.ac.jp/>sokakyoiku0_10_9.pdf 2019年3月10日アクセス。

斎藤正二2019「『人生地理学』補注」補遺（第6回）』『創価教育』（12:125－164）所収。

https://soka.repo.nii.ac.jp/>sokakyoiku0_12_12.pdf 2020年1月17日アクセス。

坂本幹雄2016「あとがき *Start From the 40th Anniversary* —池田思想研究の旅再び—」創価大学通信教育部学会編『池田思想研究の新しき潮流』（251－258）所収、第三文明社。

坂本幹雄2019「『人生地理学』経済思想研究序説—牧口常三郎初期経済思想研究 1—」創価大学通信教育部学会編『通信教育部論集』（22:37-59）所収 https://soka.repo.nii.ac.jp/>tusinkyokuburonsyu0_22_03.pdf 2019年8月11日アクセス。

竹中労1983－1987『聞書・庶民烈伝 牧口常三郎とその時代』全4巻、潮出版社。

山口徹2005「『牧口常三郎研究ノート』新蒐集文献の覚え書（その2）「地理教授の根本的革新」』『創価教育研究』（4:286－301）所収、創価大学創価教育センター。

山口幸男2009『地理思想と地理教育論』学文社。